

閉会の挨拶

柴崎 亮介 (東京大学生産技術研究所 教授)

閉会の挨拶を述べさせていただきます。柴崎と申します。私、実はナノテクノロジーの専門家ではまったくございません。どのくらい違うかという、このポスターを見た研究室の学生が私のところに走ってきて、「ナノテクノロジーの講演会でなぜ閉会の挨拶されるのですか」と怪訝な顔で聞くほど関係がない、関係がないわけでございます。

なぜそんな人間が、ここで最後の挨拶をさせていただくのか、その理由は生研の学術講演会の目的でございます。学術講演会は、生研で育ちつつある様々な成果を皆さんに知っていただくということがもともとは第一の目的だったと思うわけですが、最初に西尾所長の挨拶でもありましたように、ほかの世界、特に産業との連携、あるいはインタラクション、それをいかに促進して、さらに新しい産業や技術、あるいはサイエンスの創生に結び付けていくかということにわれわれは非常に意を砕いておりまして、その一環としてこういったものを企画しているわけです。その企画グループの取りまとめ役を私がさせていただいておりますので、そういったことで最後の閉会の挨拶をさせていただくわけです。

この講演会は、先ほど事務局のほうに伺ったところ、240名ご参加いただきました。年度の初めの、とかくばたばたしがちなときにこれだけお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。椅子が足りなかったり、一部の方には二階のラウンジに行ってテレビで見ていただくというようなことをせざるをえなくなりました。この建物、見かけは立派ですが、最大の会議室がご覧のように天井も低く、いまいちでございます。何年か後には改善される予定ではございますが、お詫び申し上げます。

ナノテクノロジーについては、私もきょう多少勉強させていただきましたが、確かに非常にいろいろな分野に大変な影響を与える根幹技術です。ただ、これが世に出て実際に役に立つには、ナノテクノロジーから出てきた様々なデバイスのうえに、さらにそれプラスアルファのいろいろな技術開発あるいは研究開発が積み重なって、ようやく技術革新が木の根っこからこずえの葉っぱのところまで行くのだろうと思うわけです。

こうしたプロセスは放っておいても根から幹が生えて葉

っぱがどんどん出ていく。長い間かければきっとそうなるのだろうと思いますが、この世界的な規模での競争時代において非常にスピードが要求されるときには、おそらくのんびりそうやって育てていくというのは全く十分ではないのだろうと思います。例えばサッカーの試合などでいえば、こういう技術が完成すると信じられないほど正確なロングパスができるようになる。ただパスだけでは試合にはなかなか勝てないわけですし、最後やはりストライカーがゴール前でボールを受けて蹴りこまないといけないうわけですね。ところがそういうストライカーというか、梢部分の仕事をしている人たちは、そんなすごいロングパスが飛んでくるなんて思ってもいけませんので、自分のすぐ周りにいる味方だけを見てだれかパスをくれないかと思っているわけです。ところがはるかかなたからもすごいパスが来る可能性がある。そういうのを全然知らないと、今後の戦略の組み立て方も誤ってしまい、非常な無駄になります。ですからこういう講演会で、少なくともストライカーの方に、そういうパスが飛んでくる可能性があるの、近くのフォワードの選手だけでなく、もっと遠くにいる味方選手、ディフェンダーなどもきちんとウォッチしていただかないといけないうことを知って頂かないといけません。また、あるいはそういうパスが出るようになれば、どんな戦略が一番有効で試合に勝てるのか、おそらくまったく新しい戦略もあるのだろうと思います。それは監督になるような方にぜひちゃんと考えといていただかなくてはいけない。こうした内容は石田教授がお話になられた政策の話などに非常に密接に結びついてくるのだろうと思います。

このように生産技術研究所では個別個別の技術やサイエンスを進化させるだけではなくて、新しい戦略だとか、あるいは関連する分野のプレーヤーの方に「今度はこういう新兵器が出るかもしれないので、ぜひそれを使って、さらに得点力を上げていただきたい」というような情報発信を積極的にさせていただきたいと思います。今後も皆さまのご協力あるいはご指導をよろしくお願いしたいと思います。以上です。どうもありがとうございました。

(了)